

ヴァイマル期における学校田園寮での教育実践について — ルドルフ・ニコライに焦点を当てて —

江 頭 智 宏〔鹿児島大学教育学部（教育学）〕

Educational Practice in "Schullandheim" in the Weimar Era

— Focusing on the Educational Practice of Rudolf Nicolai —

EGASHIRA Tomohiro

キーワード：学校田園寮運動、新教育運動、自然の中での集団宿泊活動、合科学習、体験学習

1. はじめに

2008年3月に小学校学習指導要領と中学校学習指導要領が告示され、小学校学習指導要領については2011年度より全面実施された。小学校学習指導要領の特別活動における前学習指導要領（1998年12月告示）からの大きな改訂事項として、従来から明記されてきた特別活動全体の目標に加えて、各活動・学校行事ごとの目標もそれぞれ定めたことが挙げられる。そのひとつである「学校行事」に関しては、「学校行事を通して、望ましい人間関係を形成し、集団への所属感や連帯感を深め、公共の精神を養い、協力してよりよい学校生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる。」という目標が新たに謳われた。

そのうえで「学校行事」の5つの内容のひとつである「遠足・集団宿泊の行事」も、現行の学習指導要領において以下のように改訂された。「自然の中での集団宿泊活動などの平素と異なる生活環境にあって、見聞を広め、自然や文化などに親しむとともに、人間関係などの集団生活の在り方や公衆道徳などについての望ましい体験を積むことができるような活動を行うこと」。これを前学習指導要領と比較すると、まず「自然の中での集団宿泊活動などの」という文言が追加されたことが挙げられる。すなわち「平素と異なる生活環境」の例として、「自然の中での集団宿泊活動」が特に示されたのである。もちろん従来から「自然の中での集団宿泊活動」自体は実施されていたが、敢えて明記することで、これまで以上に「自然の中での集団宿泊活動」を重視するという現行の学習指導要領の姿勢が窺える。「小学校学習指

導要領解説特別活動編」（以下「解説」とする）においても、「特に、児童の発達の段階や人間関係の希薄化や自然体験の減少といった児童を取り巻く状況の変化を踏まえると、小学校段階においては、自然の中での集団宿泊活動を重点的に推進することが望まれる。」¹と述べられている。「学校行事」に関してもう一つ追加された文言は、「人間関係などの」である。「解説」によれば、両者を追加した理由は、「自然の中での集団宿泊体験や異年齢の交流などを含む多様な人々との交流体験、文化的な体験などを重視する観点から」²としている。

このように2011年度から全面実施された（ただし特別活動は2009年度より先行実施された）現行の小学校学習指導要領の特別活動において、「自然の中での集団宿泊活動」の重視がその特徴のひとつとして指摘できるが、こうした活動を体系的に実施しているもののひとつとして、ドイツにおける学校田園寮運動（Schullandheimbewegung）が挙げられる。学校田園寮とは、自然豊かな田園地帯に設けられた教育施設であり、特に都市部にある学校の子どもたちが滞在するものである。学校田園寮では、都市とは異なった環境の中で、合科学習を始めとして、体操、スポーツ、水浴、散策、遠足、音楽、演劇、討論、菜園活動などの諸々の活動を実施しながら、集団生活が送られる。まさに日常の学校教育を補完する役割が課せられていることが窺える。こうした学校田園寮での教育活動の推進を目指すものが学校田園寮運動である。今日では、全連邦を統括するドイツ学校田園寮連盟（Verband Deutscher Schullandheime e. V.）

と共に、各州にも学校田園寮連盟が存在し、これらの連盟によって学校田園寮運動は組織されている。現在の学校田園寮の数は350ほどである。

こうした学校田園寮運動はヴァイマル期に起源が求められ、100年近くの長い歴史を有する。ヴァイマル期は、同時期の諸外国と同様にドイツにおいても新教育運動が盛んであった時期であり、学校田園寮運動もその一端を担ったものとして位置付けられる。また、学校田園寮運動は公立学校を舞台とした新教育運動という特徴を有する。本稿では、学校田園寮運動の源流を明らかにする観点からヴァイマル期に目を向ける。具体的には、ドイツ学校田園寮全国連盟 (Reichsbund der deutschen Schullandheime e. V., 「ドイツ学校田園寮連盟」の前身)の初代理事長であり、ザクセンのアンナベルクスのギムナジウム教師であったニコライ (Rudolf Nicolai, 1885-1970)のヴァイマル期の実践に焦点を当てる。ニコライは、その立場上、ヴァイマル期における学校田園寮運動の中核的存在であり、学校田園寮運動の源流を探るうえで恰好の人物であると言える。その際に本稿が主として用いる史料は、ザクセン中央州立文書館に所蔵されているルドルフ・ニコライの史料のNr. 30のファイルの中に収められている、彼の未刊行の回想記「ドイツにおける学校田園寮運動の端緒の回想—20世紀前半におけるドイツの学校制度の内的革新の試み—」である。これは、彼の生涯の中でも、生誕から第二次世界大戦の終戦までを対象としたものである。題目に端的に示されているように回想記の軸は学校田園寮運動であり、学校田園寮運動はニコライにとって自らの生涯を最も象徴するものであった。この回想記は1960年に著されたものであり、同時代的な史料ではないという限界はあるが、回想記という性格上、個人的かつ具体的なエピソードが一人称の観点から綴られており、学校田園寮運動における具体的な個人の実践を探るうえで優れた史料的価値を有するものと考えられる。

ヴァイマル期における学校田園寮運動に関しては、管見の限り、ドイツにおいては、新教育運動のネットワーク形成の観点から取り上げたクルーゼの研究³やシュミットの研究⁴、ドイツ学校田園

寮連盟の75周年を記念して編纂された学校田園寮運動の通史におけるクルーゼとミッタークの研究⁵などが挙げられる。また日本においても、ベルリン市の新教育運動を明らかにする観点から、特にベルリンの学校田園寮について取り上げた小峰氏の研究⁶などが挙げられ、筆者もかつて学校田園寮の目的の多様性の観点からヴァイマル期の学校田園寮を論じた⁷。

こうした学校田園寮を言わば総体的に論じた先行研究に対して、本研究はニコライを通して、個人の具体的な実践のレベルの観点から学校田園寮運動をミクロに検討することを試みる。なお、本研究で主に依拠するニコライの回想記は、先に挙げた先行研究においていずれも取り上げていない史料である。

2. ヴァイマル期における学校田園寮運動

ニコライの実践に入る前に、ヴァイマル期の学校田園寮運動についてまず概観する。他の新教育運動とは異なって、学校田園寮運動の起源や創始者は、明確に特定されるものではない。基本的には第一次世界大戦後に、教育者を中心としてドイツ各地で独自に多様な様相を呈しながら開始されたものであるが、第一次世界大戦以前にも学校田園寮運動に相当する思想や実践を指摘することができる。学校田園寮運動の始まりに関してニコライは、「学校田園寮の思想は、確かに初めて戦後 (第一次世界大戦後—引用者) 公的に明らかになった。それは、民族全体の必要からではあるが、特に青少年の身体的・精神的必要から生まれたものである」⁸と述べている。

学校田園寮運動は着実に広がり、ニコライによれば、既に1925年には120の学校田園寮が存在したとされる⁹。これらの学校田園寮運動が初めて統一的な動きを示したものが、ヴァイマル期において新教育運動を推進したベルリン中央教育研究所 (Zentralinstitut für Erziehung und Unterricht in Berlin) において1925年10月6日～7日に開催された全国会議である。この会議において71名の賛成署名によってドイツ学校田園寮全国連盟の設立が決定され、ニコライは、連盟設立準備委員会の委員の一人として選出された¹⁰。翌年の1926年10

月1日～3日には第2回の全国会議がデュッセルドルフにおいて開催され、ニコライを理事長としたドイツ学校田園寮全国連盟が正式に発足した。全国連盟は、独自に行われていた学校田園寮運動を組織的に実施していくうえでの確固たる基盤を与えるものとなった。連盟は10月1日付けで全11条からなる連盟規約を発表した。第3条で連盟の目的を示しており、「全国連盟の目的は、ドイツにおける学校田園寮運動を支援し、それによって革新的な影響を教育制度に与えることである」と謳われた。またそのための連盟の活動として、「世論と学校に向けての学校田園寮の思想の宣伝」や「学校田園寮思想を発展させていくこと」などが挙げられた¹¹。

なお、「学校田園寮の思想」に関しては、連盟理事の一人を務めたザールハーゲ（Heinrich Sahrhage, 1892-1967）の以下の言葉が端的に示している。学校田園寮運動の目的を明示するためにも、ここに掲げておきたい。「以下のことが学校田園寮の思想の基盤である。個々のまとまった学級を教師の指導のもとで外へと出すこと、学校において存在する活動共同体を生活共同体へと拡大すること、同時に、身体的保養と精神的休養に奉仕すること、授業に対して新しい貴重な刺激を得ること」¹²。このように、普通の学校での教育を革新していくものとして、多岐にわたる期待を学校田園寮運動に向けていたことが窺える。

その後も、第3回の全国会議が1928年にハンブルクにおいて、第4回の全国会議が1930年にドレスデンにおいて開催され、一連のドイツ新教育運動のひとつとして、学校田園寮運動もヴァイマル期を通して着実にその基盤を固めていった。そしてその最も中核にいた人物の一人がニコライであった。

こうした全国的な基盤整備が進められていく一方で、各地に学校田園寮が開設されていった。ニコライが主に実践を行ったのは、チェコとの国境に位置するエルツ山地のイエーシュタット（Jöhstadt）の学校田園寮であり、彼はこの学校田園寮が主要な交通から遮断されていることに利点を見出していた。イエーシュタットの学校田園寮は、1923年に週末と休暇中のみ用いられるもの

として始まったが、翌年の1924年からは学期中の平日にも使用されるようになった。宿泊のための70のベッド、授業を行う場所や食堂として使用される2つの大きな共同部屋、寝室とつながった22の洗面台のある洗面所などが設けられており、その後増改築もなされていった¹³。

3. ニコライにおける合科学習

ニコライの回想記には、4度の全国会議を中心としてヴァイマル期に多くの頁を割いているが、ヴァイマル期を対象とした節のひとつに、「教科書としての学校田園寮の環境」というものがある。教科書に書いてある内容を淡々と教えるだけの、教育内容が教科書によって束縛された授業を超克しようとするのは新教育運動に特徴的な姿勢であるが、学校田園寮の環境そのものを「教科書」ととらえたこの節のタイトルから、ニコライにも同様の姿勢があったことが窺える。

この節で取り上げられた実践は、16歳の生徒たちを対象としたものである。回想記には日付や時間まで明記されていないため詳細な日は分かりかねるが、回想記の中の記述から、1928年のある日の午前中の3時間に行われたものであることは確かである。ニコライが回想記の中で敢えてこの実践を取り上げたことは、彼の人生においてよほど印象に残る教育実践であったことが窺える。

授業は最初から屋外で行われ、ニコライが石の上に座り、生徒たちは芝生の上に座って半円の形でニコライに相対するという形態で始まった¹⁴。教室の中で固定された椅子に秩序正しく座るといふ授業形態に縛られず、積極的に屋外に出て豊かな自然のもとで学習することは、新教育運動の大きな特徴であると同時に、学校田園寮運動の根幹にある立場であった。

ニコライは生徒たちを前にして、最初に、エルツ山地が褶曲運動の結果生じたことなど、地学の観点からエルツ山地の形成史について語った¹⁵。なお褶曲運動による形成はエルツ山地に特有のことではなく、アルプス山脈をはじめ、ヒマラヤ山脈、ロッキー山脈など、世界の主要な山脈も多くが褶曲運動によって生まれたものである。

こうした地学の時間の最中に、生徒たちに突然

動揺が走った。ニコライがその理由を尋ねると、森の中からガサガサと音がして怪しいとのことである。それに対してニコライは、そのようなものを気にせずに授業に集中するようにと生徒たちを諭すのではなく、逆に生徒たちをすぐに移動させて、「さあ、聞く練習！それはいったい何だろう？」と課題を投げかけた¹⁶。このように、地学の授業を中断してガサガサと音のする方に生徒たちを向かわせたことから、生徒のいかなる些細な反応をも無視することのないニコライの姿勢が読み取れる。またここでの生徒の些細な反応は、屋外での授業であったからこそ生じえたものであると言える。

生徒たちはニコライの指示に従って、ひそひそ声以外は一切出さずに隠れて静かに音を聞いた。音の正体は近くのポヘミア森からやってきた鹿ではないか、あるいはもしかするとタバコや塩の密輸業者ではないか、などと生徒たちが各々想像していると、枝の折れる音とともにニコライや生徒たちの前に茂みの中から姿を現したのは、一人の年配の男性であった。男性は森の中でキノコを採集していたのである。ニコライは回想記の中でこの男性のことをSchwammesucher（キノコ採集者）と取って記している。というのもエルツ山地においては、キノコのことを、ドイツで一般的な言い方であるPilzとは呼ばずSchwammと呼ぶからである¹⁷。なおSchwammは一般には海綿動物やスポンジなどの意味をもつ。こうした記述からニコライは方言の存在を極めて重んじていた人間であることが窺える。

興味津々の生徒たちはすぐに男性を取り囲み、彼を連れてきて、彼が袋の中にもっているキノコを見せてくれるようお願いした。男性は採集したキノコをニコライたちに披露し、それぞれのキノコの名前を説明した。また彼はキノコ採集のベテランとして、誤ってキノコと毒キノコを取り違えないように警告した。この状況についてニコライは、「私たちは突然に植物学の中にいる」と記している¹⁸。地学で始まった授業は、ガサガサとした音をきっかけとして思いがけず植物学へと展開したのである。

植物学の観点からキノコについて聞きながら

も、多くのキノコに対する彼の呼び名が、自分たちが普段用いているものとは異なることについて、ニコライや生徒たちは注意を引いた。そしてニコライたちは、男性がポヘミアのドイツ人であることが分かった。キノコに対する違った呼び名に驚いた生徒たちに、男性は、彼の娘がいるスイスでは、キノコにさらに異なった名前があることを教えた。また、娘がスイスにいる理由については、「プレスニッツ音楽隊」の一員としてスイスに渡り、そこでパン職人の男性と知り合い結婚したため、そのまま住んでいることを話した。当然ながら「プレスニッツ音楽隊」について聞いたことがない生徒たちは、「プレスニッツ音楽隊とは何ですか？」と男性に質問した。質問に回答する前にまずは男性も招待して一緒に揃って朝食のパンを食べ、それから男性は、「プレスニッツ音楽隊」にまつわる郷土の歴史について簡単に話し始めた¹⁹。

彼の話によると、山岳都市プレスニッツが建てられたのは、当時から見て400年ほど前に、人がほとんど入り込めなかったエルツ山地のミクヴィディ森において、銀、鉛、銅、鉄の鉱脈が見つかったことにさかのぼる。鉱脈を目当てにドイツ全土から鉱員がやって来て、彼らが居住するために建てたのがプレスニッツということである。ただし鉱脈も次第に尽き始め、その結果、貧困がプレスニッツの人たちを襲った。鉱員として生計を立てられなくなったプレスニッツの人たちは、木こりや薬草売りなどの職をこなしながら何とか食いつないでいった。そうした中で先見の明のある市長が、音楽隊を結成することを提案した。音楽隊となって演奏に出かけていってお金を稼ぐというものであり、こうして誕生したのがプレスニッツ音楽隊である。プレスニッツ音楽隊は次第に活動の場を遠くにまでへ広げていき、優れたコンサートホールで演奏するまでになった²⁰。彼の娘の話のきっかけとして、生徒たちは、男性から、植物学に続いて郷土史について学ぶことになったのである。

ニコライは、ポヘミアのドイツ人である男性の話聞きながら、貧困から移住を強いられた、世界各地にいるドイツ人に思いを馳せるようになって

た。そしてその日の夜に、19世紀のドイツの詩人フェルディナント・フライリヒラート (Ferdinand Freiligrath, 1810-1876) の「移民」という詩を朗読しようと考えた²¹。フライリヒラートは、ドイツ三月革命を熱狂的に支持するなど政治への関心から多くの政治詩を残した詩人であり、政治活動のゆえに20年にわたるイギリスへの亡命を余儀なくされた²²。その日体験したこととも関連させながら、その日の活動の終わりになされる夜の詩の朗読は、情操を育む観点から、学校田園寮における特徴的な教育活動のひとつであった。全人的な教育を目指した学校田園寮の性格が伝わってくるものである。

ここで一人の生徒から関連する質問が来た。それは、以前は移住者が多く、ドイツ人の人口が大きく減少したが、今日では海外への流出が比較的少ないということを知ることは是非を問うものであった。それに対してニコライは、心の中で周辺の村を思い浮かべるようにと解答する。そのようにしてニコライが指摘したかったのは、農家の間に挟まれるように建てられた大小様々な工場の存在である。そして、確かに工場は土地の景観を美しくはしなかったが、一方で工場は、もしそれがなければ別の土地で食い扶持を探さなければならなかったような農家の子どもたちに仕事と賃金を与えたことを述べた。すなわち、否定的な側面もないことはないが、少なくとも移住者の減少にとって工場の存在が極めて大きいとニコライは説明したのである。そして課題として、生徒たちの周辺にある工場をニコライは列挙させた²³。このように、生徒の質問から、今度は経済学的内容へと展開された。

続いて生徒たちは、男性にどのような職業に就いているのかを尋ねた。それに対して小さな燻製の製造所を所有していると答えたのであるが、生徒たちには意味が通じなかった。というのも、先ほどのキノコの呼び名と同様に、彼の使用した Selcherei (燻製製造所) というドイツ語が、生徒たちが普段から使用しているドイツ語と異なっていたからである。生徒たちにとってのこの純粋な発見は言語の教育の格好の素材となった。すなわち男性は、ポヘミアにおいては、食肉に携わる職

業に関してはその内容によって呼称が多岐にわたり、動物の畜殺者は Freischhauser ないしは Metzger 食肉加工者は Selcher、食肉販売者は Fleischer と、それぞれ区別して呼ぶことを教えた。このことについてニコライは、回想記の中で、「私たちは思いがけず言語学の時間になり、あちら側の言語遺産は本質的に私たちのものとは異なっていることを体験した」と述べている。その他にも、「板金工」のことを生徒たちが普段使用する Klemper ではなく Spengler と称すること、靴墨や木靴から食料品に至るまで様々な商品を置いている小売店を経営する人を Gemischtwarenhandler と称し、荒い黒パンだけをつくるパン食人を Schwarzbäcker と称することなど、職業に関する様々な呼び方の違いを伝えた²⁴。このような、様々な言葉の違いを教室の中で機械的に教授するのではなく、男性との対話を通して遭遇した生徒たちの自然な驚きから文字通り思いがけず教授が展開されたことは、ニコライの理想とした教授の在り方であったと考えられる。

回想記の本節は、以下のような記述でまとめられている。「途中で生徒たちが生き生きと予想外の体験について語り合った。3時間のうちに、地学、植物学、郷土史、民族史、経済問題、方言、言語学など様々なことが話題になったという点で私は満足した気持ちであった。そのとき突然、腕白小僧が私のそばに来て、『キノコを採っている人が来たのは良かったです』と言った。私は『どうしてそう思うの?』と尋ねた。彼は答えた。『そこで少なくとも授業が終わりになったから』。この答えに私は、最初は少しの間驚いた。『どうして君は時間が失われたのにそんなに誇らしいのか?』。しかし次の瞬間大きな心からの喜びが私を襲った。というのも、この答えは、根本において大いに喜ばしい賛辞である。『授業』として見なされる授業ではなくむしろ体験になるような授業は、教育者や教師の確かに重要な目標である」²⁵。

ここに述べられているように、この3時間は、教室という狭い空間の中だけにいたのでは出会うことのできなかった、ポヘミアのドイツ人であるキノコ採取者との対話や関わりを通して、植物学

や歴史学から言語学に至るまで多様なことが学習の対象となったことが特筆される。すなわち、国語や理科といった従来の教科の枠にとらわれることのない、合科的な学習を彼が理想としていたことが窺え、この時間はそれが実践されたのである。さらに最後に明確に示されているように、ニコライは、旧来のような「授業」とは感じないような、体験に基づいた授業を重視していた。生き生きと予想外の体験について語り合う生徒たちの姿はまさしくニコライの理想であり、そのためこの時間は、ニコライにとっても生徒たちにとっても「飛ぶような3時間」になったのである。

ところで、本筋からは脱線するが、この実践に関連して1点だけ指摘しておきたい。ニコライは、回想記の「教科書としての学校田園寮の環境」の最終段落の前の段落で以下のように記述している。「最終的に会話はチェコに対するドイツの張り詰めた位置へと至った。向こう側のドイツ人は正当防衛へとせき立てられていると感じている。そして男性は、『ライヒ内のドイツ人は私たちを見捨てるのか』『私たちはもう一度ライヒへと戻れるのか』と尋ねた。『ライヒ』の概念は、あちら側では、神秘的な、そして切望される栄光によって縁取られている。私たちは義務を意識しているか」²⁶ こうした記述に見られるように、エルツ山地という土地柄も反映してであるが、ニコライが学校田園寮運動に対して、旧来の硬直した教育からの脱却といったことの一方で、民族主義的なものを求めていたことは否定できない。この授業も、在外ドイツ人の存在の認識を通して生徒たちに民族意識を高揚させるという面でも優れていたとニコライが考えていたことは否めないことである。ベルリン中央教育研究所の機関誌の中でも、ニコライが、学校田園寮運動において、外国人に住むドイツ人との交流を重視していたことを垣間見ることができる。ニコライは機関誌上で、1926年5月に12人のバナトのドイツ人の若者たちをイェーシュタットの学校田園寮に無償で受け入れたことを報告した（ちなみにこの機関誌は、学校田園寮に関する要件を掲載するために一定のスペースを自由に使用することができると定められていた）。そして若者たちと自分の生徒た

ちとの交流の成果について、以下のように記録している。「直接の、形式張らない個人的な意見の交換において、講演において、そして歌曲の夕べに際して、生徒たちとゲストたちは、お互いに知り合うことができより親しくなった。バナト人たちが、ハンガリーの、南スラブの、ルーマニアの支配のもとでの彼らの個人的な体験について話をしたとき、それを本の叙述から得るよりも深い印象を残した。彼らの方言、衣装、歌は、全く固有の体験を私たちの生徒たちにさせた」²⁷。回想記の中の記述と同じように、バナトのドイツ人との交流を通じた、書物から得るよりもはるかに効果的な体験学習の成果が謳われている。ただしここでも、異文化理解というよりもドイツ人としての意識の高揚を、ニコライがこうした学習に求めていることが窺える。

4. ニコライにおける問題行動への対応方法

続いて、同じく回想記においてヴァイマル期を対象とした「罰か償いか」と言う節を通して、ニコライの教育方針等について考察したい。

これも詳細な年月日は記されていないが、学校田園寮滞在中に、ニコライの16歳の生徒たちが、夜の23時頃に学校田園寮を教師に気付かれぬようにして抜け出し、ライプツィヒのギムナジウムの学校田園寮に侵入して静寂の邪魔をするという事件が起きた。事件を起こした理由は、ライプツィヒのギムナジウムの生徒たちとのサッカーの試合において、審判の明らかな不公正によって、ニコライの生徒たちが敗北したことの復讐からであるが、警察に通報されることによって、ニコライの生徒たちの仕業であることが結局途中でばれてしまった。その後ニコライにも責任が問われ、学校田園寮運動の反対者からはここぞとばかりにニコライに学校田園寮での教育の在り方について批判が向けられた²⁸。

この事件に関してニコライは、生徒への対応について、決して頭ごなしに責めるようなことを言わず、罪悪感を抱いている生徒たちを前にして次のように言った。「哲学者カントは、彼の定言命法において、普遍的立法の原理として妥当するように行為せよと要求しました。君たちは、しか

し、不正によって不正を償うという思いこみが支配しているクライストのミヒャエル・コールハースのように見えます。誰かが愚かな行為を犯したとき、その行為を後悔してもどうしようありません。処罰を甘んじて受け入れることは正しい解決法ではありません。違反行為は善良な行為によってのみ再び埋め合わせることができます。だから君たち、君たちに大変多くの体験をさせてくれる我々の美しい学校田園寮に、どのようにしたら良い行いを通した喜びと、そしてそれによる償いをもたらせるかということをよく考えなさい」²⁹。

クライスト (Heinrich von Kleist, 1777-1811) は、主に19世紀初頭に活躍したドイツの作家であり、ミヒャエル・コールハースとは、自殺により亡くなる前年の1810年に刊行された彼の小説『ミヒャエル・コールハース』の主人公である。『ミヒャエル・コールハース』は、「伯楽のコールハースが田舎貴族によって自分の持馬に加えられた不正に対し、身命を賭して徹底的に戦うという激烈な物語」³⁰であり、コールハースによる復讐が作品の基底をなしている。ゆえにニコライは、復讐として夜間の侵入を行った生徒たちをコールハースになぞらえたのである。しかしニコライは、コールハースの行為を「不正を不正によって償う」ととらえて否定的に認識しており、それに対してカントの定言命法を理想的なものとして位置付けた。そしてそのことを踏まえて、違反行為は決して罰を受けることによって償うことはできず、善良な行為を通してのみ償えるという考えを生徒に向けて示した。ニコライは生徒たちに単純に罰を与えることはしなかったのである。

なお、回想記の中でニコライは、「この夜の事件へのかつての参加者の一人が30年後に私に報告した」³¹と記したうえで、この事件の内容について記している。警察等からは事件の内容について事件当時に聞かざるを得なかったものの、生徒たちからは事件当時には決して詳細を問い直すようなことせず、30年後に「思い出話」として漸く生徒自身から耳にするに至ったのである。ここからも、生徒を信頼するニコライの教育方針を垣間見ることができる。

ニコライの言葉を受けた生徒たちはこれに応え

た。事件から数週間が過ぎた10月のある日、学級長がニコライに、明日学校田園寮に来てもらうように依頼した。承諾したニコライが次の日学校田園寮に到着すると、生徒から、「ニコライ先生。先生は、ライブツィヒの学校田園寮での夜の事件を良い行動を通して償うべきという助言を、あのおときされました。どうかこちらへ上がって来てください。」と言われた。生徒の言葉に従って上がっていくと、ニコライは、冬を越すために新しいたくさん薪が準備されているのを目にした。しかも薪は、きちんと真っ直ぐに整えられていた。生徒たちは学校田園寮には最も必要なものは薪であることが分かり、ニコライに内緒で準備したのである。材木を入手できる山は学校田園寮から遠く離れた場所であるうえに馬なども使うことができなかったが、生徒たちは協力して学校田園寮に木を運んでいった。このような生徒たちの償いに対して、ニコライは大いに賞賛した³²。

こうした生徒たちの行動からは、ニコライの生徒への対応が的確であったことを指摘することができる。また、生徒たちの問題行動を引き起こしたのはものの、一方で生徒たちに協力して薪を準備させるという体験をさせた学校田園寮は、知的な側面のみならず道徳的な側面においても、生徒たちの教育にとって貴重な環境であったと言える。

5. おわりに

以上、本稿においては、「自然の中での集団宿泊活動」の先駆的な実践としてドイツの学校田園寮運動を位置付け、とりわけヴァイマル期のニコライに焦点を当てて検討してきた。回想記に依拠しながら本稿で取り上げた2つの実践からは、ニコライの教育上の考え方が様々に垣間見られるとともに、学校田園寮が生徒たちの教育にとって優れた教育環境となっていたことが窺える。

第3節で取り上げた事例は、体験的な方法に抛りながら合科学習がなされたという新教育運動を象徴する実践であり、教師であるニコライが意図せずに教授が展開されたことが特に興味深い。学校において知識や文化的遺産を伝達する際に、できる限り教育者による意図的な教授を避け、かつ

できる限り被教育者の興味・関心に委ねるということは新教育運動が目指したひとつの大きな方向性であると言える。そうした中で、回想記であるために多少割り引かなければならないかもしれないが、ここでのニコライの実践は、意図せざる教授の中で、生徒の純粋な関心のもとに知識や文化的遺産が伝達されたという点で極めて理想的な教育実践であった。それゆえ1960年の時点で回想記にこの実践を記したのであり、こうした実践は、教師の力量に加えて学校田園寮という環境の中でこそ生み出されえたものであったと言えよう。

第4節で取り上げた事例は、問題行動を起こした生徒たちに対するニコライの思いが強く現れた実践である。とりわけギムナジウムにおける教師と生徒の間の冷たい関係は、リーツ (Hermann Lietz, 1868-1919) を始めとする新教育運動を担った多くの人物を新教育運動に向かわせる契機となった否定的な経験であったと言えるが、そのような冷たい関係とは対照的な真に温かな生徒への眼差しが伝わってくる。それゆえに生徒たちもニコライの思いに応えたのであろう。また協力して薪を準備するという行動にみられたように、生徒たちに協力関係を醸成していくうえでも、通常の学校以上に学校田園寮は効果的な環境であったと言える。

最後になるが、第3節の中でも指摘したようにニコライの民族主義的な教育思想は検討の余地を残すものである。ニコライはナチ時代においても学校田園寮運動の中核に位置しており、そのこととの関連でさらに明らかにされる必要がある。

der Weimarer Republik, in: Rütcker, Tobias/Oelkers, Jürgen(Hg.): Politische Reformpädagogik, Bern 1998, S.619-643.

⁵ Kruse, Klaus/Mittag, Tobias: Von den Wurzeln bis zum Jahre 1933, in: Verband Deutscher Schullandheime e. V.(Hg.) : Schullandheimbewegung und Schullandheimpädagogik im Wandel der Zeiten. Zusammengestellt zum 75-jährigen Jubiläum, Hamburg 2002, S.9-60.

⁶ 小峰総一郎「学校田園寮について」『中京大学教養論叢』第41巻第1号(2000年)、853-898頁。同『ベルリン新教育の研究』風間書房、2002年。

⁷ 拙稿「ヴァイマル時代におけるシュールラントハイムの活動状況について—その多義性・多様性を中心として—」『国際教育文化研究』第3号、2003年、15-26頁。

⁸ Sahrhage, Heinrich/Berger, Wilhelm(Hg.): Werden und Wirken der deutschen Schullandheimbewegung. Auszüge aus ihrem 25 jährigen Schrifttum, Bremen 1950, S.12.

⁹ *ibid.*, S.14.

¹⁰ Zentralinstitut für Erziehung und Unterricht in Berlin(Hg.): Pädagogisches Zentralblatt, Jg.6(1926), S.202.

¹¹ *ibid.*, S.203.

¹² Sahrhage, Heinrich: Das Schullandheim. Eine pädagogische Tat, in: Bundesarchiv Belrin R36/2138.

¹³ Breckling, Theodor(Hg.): Illustriertes Handbuch, Kiel 1930, S.221.

¹⁴ Nicolai, Rudolf: Erinnerungen an die Anfänge der Schullandheimbewegung in Deutschland. Versuch einer inneren Erneuerung des deutschen Schulwesens in der ersten Hälfte des zwanzigsten Jahrhunderts (künftig: Erinnerungen), in: Sächsisches Hauptstaatsarchiv Dresden, Personennachlass Rudolf Nicolai Nr. 30, S.50.

¹⁵ *ibid.*

¹⁶ *ibid.*

¹⁷ *ibid.*, S.50-51.

¹⁸ *ibid.*, S.51.

¹⁹ *ibid.*

²⁰ *ibid.*, S.51-52.

¹ 文部科学省『小学校学習指導要領解説特別活動編』東洋館出版、2008年、93頁。

² 同上、6頁。

³ Kruse, Klaus: Der Reichsbund der deutschen Schullandheime. Ein Netzwerk reformpädagogischer Praxis, in : Reiner, Lehberger(Hg.): Nationale und internationale Verbindungen der Versuchs- und Reformschulen in der Weimarer Republik. Beiträge zur schulgeschichtlichen Tagung 1992 im Hamburger Schulmuseum, Hamburg 1993, S.148-156.

⁴ Schmitt, Hanno: Zur Realität der Schulreform in

²¹ *ibid.*, S.52.

²² フライヒラートの生涯については以下を参照。フライヒラート著、井上正蔵訳『フライリヒラート詩集』日本評論社、1948年。

²³ Nicolai, Rudolf: *Erinnerungen*, S.52-53.

²⁴ *ibid.*, S.53.

²⁵ *ibid.*, S.54.

²⁶ *ibid.*, S.53.

²⁷ Zentralinstitut für Erziehung und Unterricht in Berlin(Hg.): *Pädagogisches Zentralblatt*, Jg.6(1926), S.492.

²⁸ Nicolai, Rudolf: *Erinnerungen*, S.55-57.

²⁹ *ibid.*, S.57.

³⁰ ホフマン／クライスト著、石川道雄／手塚富雄／相良守峯訳『悪魔の美酒 こわれ甕 ミチャエルコールハース』河出書房、1951年、410頁。

³¹ Nicolai, Rudolf: *Erinnerungen*, S.55.

³² *ibid.*, S.57-58.